

ドクターに聞きました

皮膚は内臓の鏡



医療法人
中川クリニック副院長
郡家 正彦先生

聖マリアンナ医科大学卒業
日本大学松戸歯学部卒業

郡家先生より

国内では数少ない医師と歯科医師の「ダブルライセンス」です。長年救急医療に携わってきて、現在はプライマリーケアを主とした内科全般の診療を行っています。このところ COVID-19 に振り回され趣味の時間がとり辛くなっていますが、息抜きできるときにアコースティックギターの演奏を楽しんでいます。



医療法人 中川クリニック
北九州市小倉北区片野 1-1-57
TEL 093-921-1113

世間を賑わせた東京オリンピック、パリンピックの熱狂は些か冷めたものの、新型コロナウイルス感染症の脅威は収束しないまま季節は冬の準備へと入りました。今回のオリパラは、

昭和39年のそれと比べると何かと騒がしい出来事が続いたので、それを見聞きするだけでも倦怠感を覚えられた方も多いのではないのでしょうか？さらにコロナ禍で不安やストレスを抱え疲労困憊している中、ふと体調を崩すこともあるので用心していく必要がありそうです。

私どものクリニックは、院長の中川が皮膚科、そして副院長の私・郡家（ぐんけ）が一般内科を担当しています。この業界では古くから「皮膚は内臓の鏡」と言われ、それを基本理念として日々の診療を行っております。

と言っても何か特別のことをやっ

ているわけではなく、ごく当たり前の診断・治療を行っているだけなのです。ただ、この「当たり前」が案外と難しいということは、当事者以外にはなかなか分かりづらいかもしれません。

皮膚病の診断には、特別な検査を必要としないことが多々あります。ほんの少し皮膚の状態を観察するだけで大まかな診断をつけるところから治療は始まります。例えば「年齢、性別、皮膚の乾燥、かゆみ、生活習慣」を知ることができれば、「加齢性乾皮症、それに伴う皮膚掻痒症。栄養バランス不良。入浴時のナイロンタオル使用で症状悪化」と連想できることはよくあります。難しいのは、原因に切り込むことです。長年「これは当然健康にいい」と思いやつてきているところ、食生活やナイロン布の摩擦が実は皮膚病を悪化させていたな

んて青天の霹靂のようなもの。そこに触れると人の心を逆なですることもあり、なかなか受け入れてもらえず治療に苦慮することもよくあるのです。

どうも治りが悪い皮膚病に出会った場合、内科的な病気を念頭に置き検査することも結構あります。そこで初めて、未治療の高血圧症、高コレステロール血症、痛風、糖尿病などがわかることも少なくありません。反対に、糖尿病を治療したり、コレステロール値や尿酸値を下げるお薬を飲み、食生活を正して適度な運動を行っていくことで、一般的な治療では改善が難しい皮膚病が徐々に姿を消していくことも珍しくはないのです。

さらに、人の心は皮膚にも内臓にもかなりの影響を与えてきます。受験や就職などで悩み・不安を抱えて

いる方は、アトピー性皮膚炎が酷くなつて日々の生活に支障をきたすことでもあります。加齢とともに避けられない認知症では、体調をうまく伝えられないことさまざまな病気が「隠れて」しまうことがあります。気づいたときには重症化していることもしばしば、認知症と上手に付き合うことがいかに大切か分かってきます。このような地道な積み重ねを毎日続けること、それが私どものクリニックの使命と考え、日々精進している次第です。

